

ワイルドのダンディズム—『ドリアン・グレイの肖像』を中心に—
佐々井啓
(日本女大)

目的 オスカー・ワイルドは19世紀末のダンディズムの代表的な人物である。これまでワイルドの講演や評論から、彼の美意識を探ってきたが、それらの研究を踏まえて、ここではワイルドのダンディズムが、彼の作品の登場人物のなかにどのように表現されているのか、という点について考えてみた。

方法 1890年に刊行された『ドリアン・グレイの肖像』は、ワイルドの唯一の長編小説である。この作品の主要な登場人物であるドリアン、バジル、ヘンリー卿の言動や趣味について検討した。

結果 ワイルドは、これらの人物を、「ヘンリー卿は、世間では私自身と判断している人物、バジルこそ私が自分自身と思っている人物、ドリアンは私になりたい人物」と述べている。しかし、ワイルドの姿は、これらの三人のすべてにみられるのである。すなわち画家バジルのモデルとなったドリアンは、ヘンリー卿から真に生きることを教えられ、「新快樂主義」に目覚めていく。その結果、ドリアンは、自らの行動や趣味においてダンディを演じていくのに対して、ヘンリー卿は、ドリアンを自分の好みに変えていくことで自分以外のダンディを作り上げようとしたのである。

ワイルドは、彼独特のポーズがあるにしても、純粹に芸術を表現しようとしている画家のバジルを自分自身であるといい、破滅に向かっていくドリアンを自分の望ましい姿として創造したのであり、したがってワイルドのダンディズムがこれらの人物を媒体として語られていると考えられる。